

# 朱子思想の「性即理」をめぐる一考察

嚴錫仁（八洲学園大学准教授）

## 1. はじめに

中国哲学のもっとも普遍的な関心事が人性の問題などの人間論にあったことはすでに先学が指摘するとおりであり、朱子（熹、1130—1200）においてもそれは、「蓋し嘗て窃かに謂えらく、先生の言、それ高く無極太極の妙を極めれども、その実は日用の間を離れず、それおくぶか幽く陰陽五行造化の蹟を探れども、その実は仁義礼智剛柔善悪の際を離れず」という、周濂溪の無極太極・陰陽の概念を日用・仁義礼智などの人間の問題に結びつけて解釈するところから、容易に推察することができる。荒木見悟が朱子学の長所を、「何よりも実践論の裏づけとして、精密な客観界への洞察をもっていること」だというのも、いわゆる朱子の宇宙論・自然論などと呼ばれる理気概念が、人間世界を説明するための基本的前提であることを示唆するものであろう。

しかしこのことは、朱子思想の自然論と人間論の結合の構図が少しも無理のない円満な統一であるとか、さらにその結合がもたらした様相を学者ならだれもが同じように受け止めたということまでを意味するものではない。結合の徹底性は後に述べることにして、自然論と人間論の結合についての相反する見解をまず紹介しよう。前者は丸山真男、後者はこれに反対する阿部吉雄説である。

道理は同時に物理であることによって、換言せば倫理が自然と連続してあることによって、朱子学の人性論は当為的＝理想主義的構成をとらずむしろそこでは自然主義的オプティミズムが支配的となる。

朱子の思想は、理想主義ではなくて自然主義的楽天主義であるという見方もある。しかし老荘的もしくは西欧的自然主義的オプティミズムとは、およそかけ離れたものであって、かえって理想主義的なものであることは多言を要すまい。……人間の本質観は性善説であったが、現実の人間観は性悪説であり、楽天的であるどころか非常に悲観的であった。

これらの両説に、各々妥当の点が認められるとするならば、朱子の説はもともとこの相反する両説を包括しているものであるということになるわけだが、結局両説の差異は、どちらが正しいかの二分法を超えて、朱子思想を照明する角度の問題というべきものなのであろう。

本稿は、こうした問題について「性即理」のテーゼに即してもう少し深く考察しようとするものである。朱子以後の東アジア思想史の展開を念頭に置いて、朱子思想の解釈の多様な可能性を示すものとして、あえて「性即理」の論理的整合性を問題にして論じる試論の性格を持つものである。